

風景の想像力から風景の科学へ
——ダゴニエのバシュラール批判——

上野 隆弘*

From the Imagination of Landscape to the Science of Landscape:
Dagognet's Criticism of Bachelard

UENO Takahiro

論文要旨

フランソワ・ダゴニエは、ガストン・バシュラールの影響を受けたフランスの哲学者である。両者の関係はよく知られているが、これまでのところダゴニエによるバシュラールの批判点は明らかにされていない。この問題を考察する際、参考になるのが歴史家ガストン・ルブネルである。ルブネルは、戦間期のフランスにおいてブルゴーニュ地方の歴史を研究し、独自の解釈を提出した。バシュラールとダゴニエは、ともにルブネルの著書である『フランスの田園の歴史』を参照し、そこから風景の主題を取り出している。バシュラールは、想像力の観点から風景を論じたのに対して、ダゴニエは科学的観点から風景を考察することでバシュラールとルブネルに見られる叙情的な風景論を乗り越えようとしている。

キーワード 風景、バシュラール、ダゴニエ、ルブネル

Abstract

François Dagognet was a French philosopher influenced by Gaston Bachelard. While scholars recognize their relationship, they have refrained from shedding light on Dagognet's criticism of Bachelard. The historian Gaston Roupnel is a valuable reference in this context. Roupnel studied the history of the Burgundy region in interwar France and offered a unique interpretation. Both Bachelard and Dagognet refer to his book, *Histoire de la Campagne Française*, and draw their landscape subjects from it. While Bachelard discusses landscape from the perspective of imagination, Dagognet takes a scientific approach and attempts to overcome Bachelard and Roupnel's lyricism.

Keywords: Landscape, Bachelard, Dagognet, Roupnel

* 大阪大学人間科学研究科博士後期課程 ; u644775j@ecs.osaka-u.ac.jp

1. はじめに

ガストン・バシュラール（1884-1962）は、科学と詩という二つの領域で仕事を残したフランスの哲学者である。科学については、エピステモロジー（*épistémologie*）と呼ばれる科学史の哲学を先導し、詩については、「物質的想像力」という概念を提起することでのちのテーマ批評に影響を与えた。その哲学が有する二面性は、実証主義とロマン主義の二つの伝統を体現したものであり、フランス哲学の中でも特異な位置を占めている。

こうしたバシュラールの仕事を引き受けた哲学者の一人にフランソワ・ダゴニエ（1924-2015）がいる。ダゴニエもまた、科学史研究を遂行しつつ、芸術に多大な関心を寄せた。ダゴニエは、バシュラールに関するモノグラフを残しているほか、複数の著作でその仕事に言及しており、その影響関係はエピステモロジー研究において広く認められている。

とはいえ、これまでのところ両者がどういった関係にあるのか、具体的な分析がなされてきたとは言いがたい。ダゴニエの哲学をバシュラールやカンギレム、フーコーのなかで位置付けたブラウンシュタインは、高等師範学校の学生でエリートコースを歩んだカンギレムとフーコーに対して、決して平坦とはいえない経歴を歩んだバシュラールとダゴニエを接近させている（Braunstein 2019）⁽¹⁾。ブラウンシュタインの指摘は、彼らに共通して見られるアカデミズムから逸脱する傾向を考えると示唆に富むものである。しかしながら、その論文は四者を比較するという構成上、バシュラールとダゴニエの具体的な内実まで分析がなされておらず、両者の哲学的関係は不明瞭なものに留まっている。

バシュラールとダゴニエの比較が困難であることには理由がある。端的に述べて両者は、科学史に取り組むアプローチや取り上げる時期が異なる。たとえば、両者はともに化学を主題とした著作を残しているが、バシュラール（2016; 2010）が十九世紀の周期表や二十世紀の量子化学を分析したのに対して、ダゴニエ（2002）が中心的に取り上げたのは十八世紀のラヴォアジエの業績であった。両者は、関心領域について類似性を持ちつつもその論点は異なっており、哲学上の影響関係を特定することは容易ではない。

本論文では、ダゴニエによるバシュラール哲学の批判的継承を探り、その

主題を明らかにすることを試みる。その際、参考に取り上げるのが、ガストン・ルプネル（1871-1946）である。ディジョン大学で歴史学を教えていたルプネルは、バシュラールの同僚であった人物であり、その哲学に影響を与えている。彼らより一世代後のダゴニエは、ルプネルの仕事に言及しつつバシュラール哲学のやり直しを試みている。ルプネルを媒介することでダゴニエがいかなる点でバシュラールを乗り越えようしたのか、その文脈を特定できるだろう。本稿では、それを「風景」という主題として提示する。

2. 争点としての大地

六十冊以上に及ぶダゴニエの著作の中で、バシュラールとダゴニエの関係を探るとき、一つの参考になると思われるのが『具象空間の認識論』（1977）という著作である。エピステモローク（科学認識論者）としてダゴニエが主に取り組んだのは、医学史であったが、地学に関する省察もその哲学の重要な一面を形成しており、本書はこの領域を扱った代表作である。

ダゴニエは、この著作の冒頭で「大地の諸科学（*les sciences de la Terre*）」が哲学の考察対象になってこなかったことを指摘する。精密科学や生物学、あるいは病理学が、ごく初期の哲学者から関心を集めてきたのに対して、大地に関する諸科学は孤立し、二次的な立場に留まってきた。ダゴニエによれば、歴史上重要なフランスの科学哲学者、すなわちデカルト、コント、バシュラールにおいても事情は変わらない（Dagognet 2018:10-14）。

たしかに、デカルトは、『哲学原理』の中で地球の生成とその源の問題を提起しており、岩石記載学的探究をおこなっている。だが、ダゴニエによればデカルトの記述は、その哲学に基づく還元主義に陥っており問題がある。デカルトが、塩の結晶、粘土、硝石等の組成を論じるとき、彼は常に微小部分の配列関係によってそれを説明した。そこでは、本当の意味での石、鉱物、油の問題に注意が向けられていない。

コントは、地質学の優れた研究がなされつつあった時期を生きつつもこの分野にいかなる位置も与えていない。コントは、当時の地質学が示す非実験的な性格に基づいて、彼の科学の分類体系にこれを組み込むことはなかった。

バシュラールは、次の二つの理由により大地の諸科学と関わることはなかった。第一に、バシュラールにとって大地は「物質的想像力」の問題に委ねられており、それは詩学の範囲で論じられるに留まっている。第二に、バシュラールは数学と物理学に特権的な位置を与えており、彼にとって大地の諸科学は精密さを欠いた学問以上のものではない。これを踏まえて、ダゴニエは次のように述べる。

自然的なものと現象工学的なものに分かれた彼の哲学が持つ衝撃的な二面性、その激しい断絶のためにバシュラールは「両者の中間」を排除せざるを得なかった。世界のさまざまな戯れ、地球物理学的な形態とその変様を、彼はただ詩的世界の枠内にもみ位置付けたのである。(……) デイジョンでの彼の同僚ガストン・ルプネルは風景、すなわち泉や森に哀愁を付与していた。ルプネルはバシュラールに現代の地学の発展様態では覆い尽くせない一つの厳密な視座を持つ方向性を与えてやることができた。そしてバシュラールが学び取ったその方向性はそれ自体としては豊かな帰結と応用に満ちたものだったのである。(Dagognet 2018:14-15)

ここでは自然と人工の二極に分化するバシュラール哲学において、両者の中間が排除されていることが確認されている。バシュラールでは詩的想像力が自然の美を、科学的理性が人工的に作り出された世界を扱うことで自然かつ人工的な領域、中間としての「地球物理学的な形態」が検討されることはない⁽²⁾。『具象空間の認識論』という著作は、バシュラールをはじめ、これまでの哲学者によって無視されてきたこの領域を再考し、それに価値を与え直そうとするものなのである。

この引用文中でバシュラールとともに名が提示され、その哲学に影響を与えたとされるのがガストン・ルプネルである。1871年にブルゴーニュ地方の村に生まれたルプネルは、1891年にデイジョン大学に入学し、歴史学と地理学を修めた。1946年に死去するまで旺盛な執筆活動をおこない、『十七世紀における都市と田園』(1922)、『歴史と運命』(1943)といった歴史書のほか、小説『ノノ』(1910)や詩集『シロエ』(1927)を発表した(Whalen 2010)。バシュラールは、ソルボンヌ大学で教える前、1930年から1940年までデイジョン大学で教鞭をとっており、ルプネルは、この時の同僚である。

ダゴニエは、この引用の後に続く『具象空間の認識論』の本論でルプネル

の思想を一面では評価し、他面では批判している。ダゴニェは、バシュラールとは異なる仕方で大地の問題に取り組む際、ルプネルを参照し、それを自説に統合している。こうしたことから、ルプネルの思想は、バシュラールの大地の詩学と同じくダゴニェの大地のエピステモロジーにも影響を与えていると推察できる。大地を主題としたダゴニェによるバシュラール哲学の批判的継承は、ルプネルを媒介することで理解できるだろう。以下、ダゴニェが念頭に置いているルプネルの仕事を確認し、ついでバシュラールがそれをどのように評価していたのかを明らかにする。それを踏まえ、ダゴニェによるルプネルの受容を確認し、彼らに共通する問題系としての「風景」を提示する。最後にダゴニェの議論を検討することで今後の課題を示したい。

3. 『フランスの田園の歴史』——内容と影響

二十世紀の前半、三十年代から四十年代にかけて活躍したルプネルの関心は、彼の生まれ育ったブルゴーニュ地方の文化、歴史に向けられており、特にワインの醸造、郷土料理を好んで取り上げた。彼は、戦間期において、ブルゴーニュのアイデンティティを促進し、現代的な協同組合の動きに対してブドウ農家を保護しようとした。その関心は、一貫して自然と人間の関係にあり、人間の手によって加工されたものとして環境、風景を考えることで労働を賞賛した。

バシュラールとダゴニェが共に取り上げ、ルプネルの歴史研究の代表作とみなされるのが、『フランスの田園の歴史』（1932、以下『田園の歴史』）である⁽³⁾。これは、新石器時代から二十世紀初頭までのフランスの農業史を多角的な視点から描き出す広範な射程を備えた著作であり、序論と結論を除けば、二部、十章から構成されている。前半では、主にその歴史研究の大枠が述べられ、後半はブドウ畑についてなど個別の議論が続く。

本書の冒頭でルプネルは、フランスの農村を南部、西部、北部および東部の三つのタイプに分割する (Roupnel 1974: 9)。ルプネルによれば、南部では集団化した農村が自由に農地を開拓しており、西部ではアルモリカ山地に囲まれ、点在した仕方で農地が形成されている。これに対して、北部および東部では、地方の人々を寄せ集めて農村が作られ、規則的に開拓が行われて

いる。農地は、ブロックごとに区画され、共同放牧地や三年周期の輪作に用いられている。ルプネルは、ブルゴーニュを含む北部および東部のこの地域を主な対象として取り上げる。

本書の核をなし、全体を方向づけているのが、第一章「起源 (Les origines)」である。ここでは、新石器時代における農業の開始 (アマ、アワ、オオムギの栽培) から説き起こし、その伝搬と定着が青銅器時代のガリア地域におけるケルト人の流入とともに語られる。それは歴史的事実としての農業の開始を記述したものとして読むことができるが、その理解は正確ではない。ルプネルは、この起源に人間と大地の理想的な調和を見てとり、これを希求している。「私たちは古い土地の精神的息子 (Roupnel 1974:331)」であり、その魂を継承している。ルプネルにとって、農業の歴史の探究は、単に学術的な関心によってというよりもある種の宗教性を帯びてなされている。

もっとも、起源における人間と大地の関係は無傷のまま現代まで引き継がれてきたわけではない。ルプネルによれば、この起源は、主に中世における森林伐採と森の使用権の導入によって失われてしまった (Roupnel 1974:112-115)。今では失われてしまった人間と大地の原初的な関係を農作業の開始に見てとること。ブルゴーニュの土地の研究を通じてこの起源へと立ち返ること。これが『田園の歴史』の中でルプネルのおこなおうとしていることなのである。客観的な視点から農業史を描き出そうとする歴史書ではなく、起源を憧憬し、それへと回帰しようとする点でこの著作はノスタルジックな書物ということができる。

では、そうした起源への回帰はどのように成し遂げられるのか。ここで重要になってくるのが、ルプネルの基本的な着想、あるいは前提である。ルプネルによれば、新石器時代における農業の起源は消え去っておらず、その姿を現在まで留めている。「人間の習慣は大きくは変わらない。ものは元の場所にある (Roupnel 1974:19)」。起源の光景は、中世における森の伐採と使用によって姿を変えてしまったが、現在の風景の中に残された痕跡、たとえば、礫土や畑の中に生えている植物 (ニレ)、藪や石積みなどを通じて復元される。ルプネルの仕事は、フィールドワークによって輪郭としての森、骨格としての道、中心部にある村を明らかにし、森と畑のせめぎ合いの中で形成されている田園の中に起源を見出すことであるとまとめることができる。

当時のフランスにおけるこの著作の位置付けについて確認しておきたい。

『田園の歴史』は、マルク・ブロックの『フランス農村史の基本的性格』(1931) やロジェ・ディオンンの『フランスの田舎の風景の形成についての試論』(1934) と同時期に出版されており、内容だけ見れば当時盛んに研究がおこなわれていた歴史地理学の著書として理解できる。

しかしながら、ルブネルは、当時主流であった文献資料に基づく研究をおこなっておらず、この点で異質なものである。歴史資料が一切参照されていないわけではないのだが、扱われている時代の広さや題材に対して取り上げられる資料の数は非常に乏しい。また、痕跡を調査するというその方法を自らの体験と絡めて語り、学術的記述として不適切な箇所が散見される。記述自体も叙情的であり、アカデミックな形式から逸脱した傾向を示している。こうした事実からルブネルの研究は、当時の地理学者、歴史学者に不評であった。『田園の歴史』は出版当初、『アナル』誌に寄稿する学者から敵視されており、その代表者であるリュシアン・フェーブールもレトリックに満ちた文体を批判している (Febvre 1934)。

アナル学派との相違は、資料調査の有無のほかにもその方法にも見てとれる。著名なルブネル研究者であるフィリップ・ウェイレンによれば、ブロックやディオンが農業的実践の全体を描き出すためフランスの空間を多数の風景に分割したのに対して、ルブネルの特徴は異なる農業的実践をただ一つの古代のシステムのバリエーションとみなしたところにある (Whalen 2006:62)。そこでは、異なる地域の比較ではなく、ある特定の地域としてのブルゴーニュの検討、その徹底を通してそれが派生する以前の起源が目指される。

こうしたルブネルの思想は、学界では高い評価を得られなかったものの政治的には大いに参照された。第二次世界大戦中、彼の著作は、ヴィシー政権のプロパガンダとして利用されたことが知られている。それは、その思想が「労働、家族、祖国」を標語として第二次世界大戦にとられた国民革命(対独協力)のイデオロギーと合致するものであったからだとされるが、ルブネル自身に政治的意図があったか否かについては研究者によって評価が分かれる。ウェイレンは、ルブネルに見られる「大地への回帰」を農業文明の観点からフランスとドイツを同一の集団に基礎付けようとするものであり、その核心は神話的根源の探査にあると理解している (Whalen 2006:61)。第二次世界大戦の間、多くの地方分権主義者は、ナチス体制の指導のもと、「偉

大なブルゴーニュ」の復興を謳ったがルプネルはこれを支持することはなかった。彼の思想が時代の空気を反映するものであったことは事実だろうが、そこに政治的含意はなかったというのがウェイレンの理解である。事実、ルプネルの思想を支配しているのは、平和の希求であって、そこに闘争的、扇動的な調子は見られない。

バシュラールの想像力論を継承するジャン＝ジャック・ヴュナンビュルジェは、ルプネルの仕事をヘシオドスの系譜に位置付けて理解する（Wunenburger 2014:179）。ヘシオドスは、農事暦などを記した『仕事と日』の中で黄金、白銀、青銅、英雄、鉄という五つの時代を説話的に物語っている。このうち、クロノスの時代に栄え、最初の間人たちの世代である黄金時代は、大地と人間の、人間と人間の間に調和が保たれた幸福な時代だったとされる。ヴュナンビュルジェの理解では、ルプネルの思想は、ヘシオドスの黄金時代の渴望にある。

以上、ここまでバシュラールとダゴニエの背景をなすルプネルについて、その基本的な思想を確認した。ルプネルの研究は、当時の歴史研究の作法に則っていない点で科学的とはいいがたいが、非科学的ということもできず、科学と非科学の間に位置するようなものである。これに対してバシュラールとダゴニエはどのような反応をしたのか。まずは、バシュラールについて確認したい。

4. 風景の想像力——バシュラールにおけるルプネル

既述の通り、バシュラールは、1930年から1940年までディジョン大学で教鞭をとっており、ルプネルはこの時の同僚にあたる。この時期のバシュラールは、『新しい科学的精神』（1934）や『科学的精神の形成』（1938）などを公刊し、主にエピステモロジーの仕事をおこなっていた。その中でルプネルの名前は『瞬間の直観』（1932）の中で頻出する。これはいわゆる時間論を展開した著作である。ただし、この著作でバシュラールが引用するのは、同年に出版された『田園の歴史』ではなく、それ以前に出版されていたルプネルの詩集『シロエ』（1927）である。『シロエ』を参照したうえで両者の影響関係を論じることも可能であろうが、本稿の主題から外れるためここで

詳しく検討することはしない。

すでに見たように、ダゴニエによれば、「ルプネルはバシュラールに現代の地学の発展様態では覆い尽くせない一つの厳密な視座を持つ方向性を与えてやる事ができた」とされる。ただし、『田園の歴史』のバシュラールへの影響はそれほど明らかとは言えない。バシュラールの詩学の中で『田園の歴史』への明示的な言及があるのは『大地と休息の夢想』(1948)の第十章「錬金術師のワインとブドウの樹」および『空間の詩学』(1957)の第八章「内密の広大さ」の二箇所過ぎない。おそらく、ダゴニエは、バシュラールが大地の詩学に取り組んだ事実に基づいて安易に両者の影響関係を語っている。時間論を除けば、両者の関係性は明らかとは言えない。だが、ここでは一旦、このことを認めた上で可能な限りバシュラールとルプネルの関係を再構成してみたい。その際、本稿では『空間の詩学』の方に依拠する。『大地と休息の夢想』の方は章のはじめに『田園の歴史』の一節がエピグラフとして引かれているだけであり、その意図が掴みにくいからである⁽⁴⁾。

まず、バシュラール哲学における『空間の詩学』の位置付けについて簡単に確認しておく。一般的にバシュラールの詩学は、「物質的想像力」という概念によって知られている。バシュラールは、この概念によってイマージュを脳内の産物とみなす通俗的な考えを退け、その源泉を外界に認めようとした。バシュラールによれば、優れた詩人は、独自の方法で自由にイマージュを作り出しているわけではない。そうではなく、彼らは、世界の側に属すイマージュに喚起され、その素材をもとに詩的イマージュを形成する。想像力とは、イマージュを創造するのではなく、変形する能力なのである(Bachelard 1990:7)。こうした観点から詩を分析したのが「元素の詩学」と呼ばれる一連の論考、すなわち『火の精神分析』(1938)、『水と夢』(1942)、『空と夢』(1943)、『大地の意志の夢想』(1948)、そして先に挙げた『大地と休息の夢想』である。伝統的な四元素を換骨奪胎し、それを想像力の根源に据えるバシュラールの議論は、のちのテーマ批評に影響を与えた。

『空間の詩学』は、上記で挙げた最後の著作である『大地と休息の夢想』を執筆後、およそ十年の沈黙を破って公刊された著作である。この著作の冒頭でバシュラールは、自らの物質的想像力という着想がイマージュの因果的説明に陥っており、その本性を十分に把握できていなかったことを反省する。その上で、「元素の詩学」の頃は否定的に扱われていたイマージュの

創造の場面へと立ち戻ることが宣言される (Bachelard 1961:1) ⁽⁵⁾。

イメージの創造の具体例としてバシュラールが好んで取り上げたのが「家」のイメージであった。バシュラールは、アンリ・ボスコの小説『骨董商』などに依拠しつつ、屋根裏部屋と地下室という両極によって現れる垂直的な家のイメージを記述する。詩人や作家によって描き出される「家」は、イメージというものがある種の方向性を示しつつ現れてくること、さらに、それは客観的な意味というよりも価値を帯びて現れてくることが述べられる。家とは、思い出の凝縮した空間であり、幸福な空間である。『空間の詩学』が描き出す空間とは、客観的に測定されるような空間のことではなく、想像する主体の中に現れる心的な空間のことを指している。

ここでバシュラールが述べようとしていることは、フランスの家のことであり、日本の家屋で生まれ育ったものにとって身に染みて実感することは難しい。しかし、屋根裏部屋や地下室を「縁側」などに置き換えてみるとバシュラールが述べようとしていることは理解しやすいのではないだろうか。縁側を思い浮かべるとき、多くの人は単にそれを家の構造の一部としてのみ扱うのではなく、たとえば、田舎の夏の夕暮れや子ども時代の楽しい日々と共に思い出すことだろう。バシュラールは、文学作品に依拠することでイメージが本源的に備えている「トポフィリー (Bachelard 1961:17)」すなわち「場所への愛」を描き出そうとしているのである。

こうした心的空間のことをバシュラールは、次のように述べる。「偉大な単純なイメージはみなひとつの魂の状態をあらわしている。家は風景以上に「ひとつの魂の状態 (un état d'âme)」である。家は外面的にその姿を再現された場合でも内密 (intimité) を語る (Bachelard 1961:77)」。バシュラールは、「魂の状態」あるいは「内密」という形而上学的な概念によって、人がイメージを想像する際、ある特殊な心的空間のうちに没入することを主張している。

ルプネルとの関係を主題とする本稿は、ここでこの引用にある「風景 (paysage)」に注目したい。バシュラールは、家は風景以上にひとつの魂の状態と言うが、このことは家には劣るものの風景もまた魂の状態の一つであることを示している ⁽⁶⁾。事実、風景の主題は、家という特権的な事例の分析を終えたのち、『空間の詩学』の後半で検討されることになる。たとえば、第八章「ミニチュアール」では、アンドレ・ピエール・ド・マンディアルグ

の詩「風景の中の卵」を取り上げつつ次のように述べられる。

それゆえ、詩人は、夢みる道具を求めて遠くさまようことはなかった。しかし、彼〔ピエール・ド・マンディアルグ〕は風景をなんと巧みに核の中へ集中させたことか。なんと豊かな空想によって多様な屈曲を空間に授けたことだろうか。(……) ピエール・ド・マンディアルグがわれわれに示すイマージュの世界にもう一步足を踏み入れて空想する中心を体験するとするならば、われわれはガラスの核の中に風景を読むことができる。(……) ミニチュアールが宇宙の次元へと展開する。(Bachelard 1961:147-148)

マンディアルグの詩は、まさにガラスのミニチュアの中に世界のすべてを押し込める。詩人は、イマージュの空間を伸縮自在に描き出すことで世界の全体、その風景を極小のガラスの中に見出すことに成功する。バシュラールにおける風景とは、こうした詩人による心的空間の縮小と拡大、その自由な創造の場面を問題にしようとするものである。イマージュの空間の極小を語るのがマンディアルグであるならば、極大の方向もあるに違いない。続く第八章「内密の広大さ」がそれに該当するのだが、ルプネルは、まさにこの箇所でも参照されることになる。まず、この章の冒頭におけるバシュラールの主張を確認しておこう。

広大さ (*immensité*) は、夢想の哲学的カテゴリーであると言えるかもしれない。たしかに夢想はさまざまな光景を糧とするが、ある種の生来の傾向として大きさを観想する。(……) 海や平野の無限の広がりとは無関係に、われわれはただ思い出によって、この大きさを観想したときの共鳴を自分自身のうちに新たに甦らせることができる。だが、果たしてそれは思い出なのだろうか。想像力だけが広大さのイマージュを限りなく大きくすることができるのではないだろうか。(Bachelard 1961:168)

バシュラールによれば「この広大さは、地理学者の教えるところとは無関係な一群の印象から生まれる (Bachelard 1961:170)」ものである。ひとは、海や平野といった現実の空間に依拠せずともそれらの広さを想像することができる。バシュラールは、具体例として森の有する「深み」などを挙げる。われわれは現実の森を見なくとも想像力の中で森の広大さを思い描き、そこに価値を与えることができる。

ところで、こうした「魂の状態」としての風景を描き出すことは万人にできることではない。それは詩人をはじめとした少数の芸術家によってなされるに過ぎない。われわれが、森に付す深みや広がりといったイメージは、多くの場合、彼らの著した書物を通じて得たものである。バシュラールにとってルプネルはそうしたイメージを提供した人物の一人であった。バシュラールは、『田園の歴史』の第三章「森」を引きつつ次のように述べる。「忘れられぬ友、ガストン・ルプネルが教えてくれたので私は田畑の広がり」と森の広がりとの弁証法を体験することができる (Bachelard 1961:172)。

前節で確認した通り、ルプネルは、森を記述しているが、そこで語られるのは、現在の森ではない。中世の森林伐採と所有権の導入によって姿を変えた森を目の前にしつつ、今やその姿を失ってしまった森を希求すること。現在に残された痕跡を頼りに起源へと遡及すること。これがルプネルのおこなおうとしたことであった。こうしたルプネルの記述にバシュラールは想像力の発露を見てとっている。バシュラールならば、ルプネルが描き出しているのは、魂の状態であると言うだろう。あるいは、われわれは、『田園風景の歴史』を読むことでルプネルのイメージの空間を迫体験することができるというかもしれない。

こうした理解に対してルプネルが賛同するかはわからない。ルプネルは自らの仕事を歴史的作業として捉えていたわけだから、森の記述を想像力の問題として理解されることは拒否するかもしれない。とはいえ、バシュラールの指摘は、アナル学派の人々によって否定的に扱われたルプネルの側面を好意的に引き出しているように思われる。資料調査が乏しく、叙情的な記述に溢れたルプネルの仕事は、アナル学派の人々から低く見積もられていた。これに対して、バシュラールはルプネルの記述に想像力の働きを見出し、その意義を積極的に認める。ダゴニエが指摘しているようにルプネルがバシュラールに「現代の地学の発展様態では覆い尽くせない一つの厳密な視座を持つ方向性を与えてやる事ができた」点があるとすれば、それはイメージの空間に関する以上の議論のうちであったように思われる。バシュラールが、ルプネルから学んだのは、可變的に伸縮するイメージの空間ということになるだろう。

5. 風景の科学——ダゴニエにおけるルプネル

これまでの議論により、ルプネルの思想とそのバシュラールによる受容を確認することができた。それを踏まえて、ここではダゴニエにおけるルプネルの位置を確認する。『具象空間の認識論』の第二章「レリーフと風景：地形学の認識論のために」は、本稿の主題と密接に関わる箇所であり、ここからダゴニエの風景論を探ることができるだろう。ダゴニエにおける風景の主題については、すでに金森（1994:174-200）が論じているものの、ここではダゴニエによるルプネルの評価について触れられていない。ルプネルとの関係に着目するのが本稿の特徴である。まずは、ダゴニエによるルプネルへの好意的な評価から確認したい。

自らを一冊の「本」になぞらえた田園の文法を明らかにした限りにおいて、われわれはガストン・ルプネルを褒め称えたい。森の縁、ブドウ畑や野原の区域、どんなに小さな小道にでも彼は一種の「記号」を見定め、一種の被覆の記号学を成立させる「痕跡」を見分けた。彼は現在の様子に隠された原初の敷地、昔の道、失われた境界線、覆われた輪郭、消し去られた跡などをしっかりと描出したので彼の地理学はまさに『フランスの田園の歴史』となった。われわれの眼前で風景は多様性を収斂させ、層状化していく。（Dagognet 2018:119）

ここでは、三節で確認したルプネルの方法が評価されている。ルプネルの方法とは、現在の痕跡に基づいて起源を辿ろうとするものであった。それは、あたかも残された証拠から事件を復元する探偵の歩みのようなものとして理解できる。ダゴニエは、一旦、このように評価を与えた後で、批判的論点を提示する。

そこでダゴニエは、ルプネルを人間の側しか見ておらず、自然の側を考慮に入れていないものとしたうえで「物理的なものと人間的なものを分けて考えない（Dagognet 2018:120）」ことの重要性を主張する。ロジェ・ディオンの仕事を考慮するならば、物理的（地球物理的）側面を無視することはできない。たとえば、土壌の性質を考慮に入れるならば、比較的楽に農作業をおこなうことができ馬を使用する北部とそれが困難なため牛を使用する南部の差異を無視することはできない。ルプネルの議論は、観察者の視点から

大地を語るだけであり、文化的視座から人間と大地の関係が扱われるに留まっている。そこには大地の諸科学が扱うような視座が含まれていない。ダゴニエの批判のひとつはこの点にある。

物理的なものと人間的なものとの交差を問題にすべきだというダゴニエの指摘は芸術論にも向けられる。『田園風景の歴史』に芸術論がない以上、これはルプネルの議論を超えるものである。とはいえ、バシュラールのことを踏まえるとこの指摘は理解しやすい。ダゴニエは、たとえば、『イマージュの哲学』(1984)で、バシュラールのイマージュ論を適切にまとめる一方、それを次のように批判していた。「物質的土台がなければ、そして、明確な知覚経験の援助がなければ、イマージュは不可能であろう (Dagognet 1984:44)」。

ダゴニエの批判は明瞭である。バシュラールのイマージュ論は詩を中心としているため物質について考えられていない。だが、たとえば彫刻や絵画などを考えてみればわかるように多くの芸術は物質に依拠して制作されており、それを無視することはできない。花崗岩は、教会を建てるのに適しているのか。あるいは、住宅を建てるのに適しているのか。建築の美学に関するこういった問題は、大地を詩的に語るバシュラールからは提起されることがない。物質的想像力を中心とするその詩学は、結局のところ物質の物質性を掬い出すことができていない。ルプネル、そして暗にバシュラールの問題点を指摘したのち、ダゴニエは自身の考えを次のように述べる。

要は、大地的なものと文化的なものというこの二つの契機を結び合わせ、同じように活動している二つの流れを一つに融合させようということだ。(……) 風景の科学 (La science des paysages) はそれらを統一しなければならない。一方で、それはさまざまな力を繋ぎ合わせる。他方で、それは現在の下に隠れている過去の指標や残滓を明らかにし、それらをより深く捉え、すべてを連携させるようにするのでなければならない。(Dagognet 2018:121)

一面では、ルプネルに好意的な評価を与えつつもダゴニエは、それに大地の諸科学を接続することを主張する。文化と自然の結合、それをダゴニエは「風景の科学」のプロジェクトと呼ぶのである。

こうしたダゴニエの指摘は、当時のフランスの地理学界にインパクトを与えたことが知られている。1970年代のフランスの地理学者は、社会学と

の結びつきのもとで主に人文地理学的な視点から研究をおこなっていた。そこでは、いまだ方法論が整備されておらず、地理学の科学性は明確に規定されていなかった。その中で、人文地理学と自然地理学の統合を説くダゴニエの主張は、地理学がそれ自身固有の対象を持つ科学であるということを経理学者に自覚させる契機となった (Le Berre 1998)。

結論部では、改めてルプネルへの批判がなされる。ダゴニエは、「ルプネルのことを念頭に置いている」とはっきり述べた上で「われわれはもはや、地理学を「世界」の一瞬や一画像の賛美には閉じ込めておけない」と述べる (Dagognet 1977:219)。そして、次のように続ける。

大地と風景の科学を、ノスタルジーに染まった具体的で色とりどりの延長の中に閉じこもるという生来の欠陥から引き離すことが重要である。その欠陥は、たしかに田園地帯や坂の詩情のリリシズムをわれわれにもたらしたが、同時に、際限のないモノグラフィの疑似学問的な平板さをも生み出している (Dagognet 1977:219)

ルプネルとバシュラールに見てとれる美的風景論からの脱却、ノスタルジーの脱色を図ることがダゴニエの狙いであり、この点で、彼はルプネルとバシュラールの問題系を批判的に乗り越えようとしているとまとめることができるだろう。

6. 考察——屑屋の哲学に向けて

以上、ここまでバシュラールとダゴニエがともに議論の前提としていたガストン・ルプネルの歴史研究を示した上でダゴニエのバシュラール批判を明らかにした。ここでは、ダゴニエの議論を検討することで今後の課題について示す。まず、ダゴニエのいう「風景の科学」についてももう少し輪郭を与えておくことにしよう。ダゴニエは、この概念を提起することで風景を地形学や地質学といった科学的語彙で語りなおそうとしている。

たとえば、その例として持ち出されるのがダーウィンのサンゴ礁論である。地質学者としても知られるダーウィンは、海岸に沿うように形成された裾礁、海岸から離れた地点に形成され、ラグーン(礁湖)を持つ堡礁、中央

の島が完全に沈降し閉鎖空間を作る環礁というサンゴ礁の三つの形態を考察した。ダーウィンは、これらを観察することにより各々のサンゴ礁が別種のものではなく、一つの形成過程の段階に対応することを発見した。その沈降説によれば、サンゴは裾礁、堡礁、環礁という順に形成される。ダゴニエは、代表的な美的風景の一つであるサンゴ礁のうちに地質学的運動を見てとるダーウィンの分析を評価する。それは、固着した空間のうちに時間の流れを読み取るものなのである（Dagognet 2018:78-94）。

風景を単なる美的対象としてのみ扱うのではなく、科学的思考と連結したものとして理解するダゴニエの主張はどのようなものとして理解することができるだろうか。金森は、特徴の一つとしてそれが遠隔的な視線が持つ認識論上の価値に注目するものであることを挙げている（金森 1994:190-191）。ダーウィンは、ビーグル号での航海によってサンゴ礁の形成過程を明らかにすることができた。このことは、物事を正確に緻密に観察するのではなく、概略的に俯瞰して見ることの価値を示している。植物の分布などは近くから見るのではなく、遠くから漠然と眺める方がよりよくわかる。遠隔性が近接性を凌駕するという認識論的に興味深い事実をダゴニエの風景論は示そうとしているのである。

しかしながら、こうしたダゴニエの主張を前にしてバシュラールやルプネルの側から反論がなされる可能性はある。彼らは次のように問うかもしれない。風景を科学的に語ることに意義があるのは事実だろう。しかし、それによって一体、何が導き出されるのか、と。

たしかに、ダゴニエの主張が、ルプネルに見られるようなノスタルジー論からの脱却を目論むものであることは間違いない。そこでは、もはや風景を美的に語り、何か目指すべき起源が残存しているようなものとして扱われることはない。しかし、科学的語彙によって風景を語るダゴニエが結局のところ何を主張しているのかは判然としない。それは、風景を地質学や地形学に回収してしまおうとするものなのだろうか。端的に述べて、ダゴニエの議論は単調な実証主義に陥っているように見えるのである。

実のところ、ダゴニエの著作にはそれによしとする傾向がある。その著作の多くを覆っている実証主義の称揚、科学主義的態度は、何か深淵な議論を提示する哲学とは非常に遠いところにある。金森は、ダゴニエの仕事の総体をまとめた論文でそれを「〈哲学〉という知的制度を瓦解させ、消散させよ

うとしている」ものだと評し、「彼が師と仰いだバシュラールやカンギレムに比べて、より複層性が少なく、思想として、純粹だとも言えるし単純ともいえる（金森 2008:230-231）」と述べている。金森によれば、その反哲学的姿勢の背景には、当時隆盛を極めていたポストモダニズムへの反発があった。

では、こうしたダゴニエの議論を前にしてわれわれはそこから何か理論的なものを引き出すことを諦めるべきなのだろうか。風景の科学を説くダゴニエの議論は、ある時期のフランスにおいてはそれなりに価値のある議論だったかもしれないが今ではもはやそこから何も得ることができないような代物なのだろうか。

現時点では、この問いに明確な仕方で応答することはできない。2015年に死去したダゴニエの評価はいまだ定まっておらず、その検討は端緒についたばかりである。それを認めた上で、今後、考察されるべき論点を提示するのであればそれは次のようなものになるだろう。

ダゴニエは、自らの仕事をまとめた著作『反射体』において、自身を「屑屋(chiffonnier)」や「古物商(brocanteur)」と規定している(Dagognet 1990:264)。ここで屑屋という呼称は、おそらく二重の意味を担わされている。まず、ダゴニエは、この語によって雑多な分野の寄せ集めによって成立している自身の著作の性格を示している。ダゴニエの著作は、複数のテーマが並べられて論じられ、まとまりがないことで知られている。『具象空間の認識論』も三章までは地学に関する話題がなされているが、「地図作成法と心理学」と題された第四章では広義の心理的空間が論じられる。こうした叙述は、読者にストレスを与えるものであるが、それは多様な領域に共通する概念を特定しようという自身の問題意識に裏打ちされたものであった。

重要なのは、もう一つの点である。ダゴニエは、屑屋という語で文字通り、ゴミ屑を評価しようとする自身の立場を表しているように見受けられる。たとえば、ダゴニエは、ある著作の中で岩石の破片である「砕屑(détritus)」や廃棄物をはじめとした卑近な対象を取り上げ、これを積極的に評価しようとしている(Dagognet 1994)。これは現代のディスカードスタディーズ(Discard Studies)の先駆けとでもいうべき仕事である。ここで、ダゴニエのバシュラール批判に立ち返ってみよう。ダゴニエは、バシュラールの物質的想像力という着想が、結局のところ物質の物質性を扱えていないことを

批判していた。哲学者は、安易に物質について語ってしまう。しかし、物質の持つ物質性は抽象的な哲学的言語にとって把握困難であり常にそこから逃れ去るようなものである。しばしば指摘されることであるが、単純な唯物論は、観念論の裏返しに過ぎない。屑屋を自認するダゴニエは、常に物質との接触を求め、語りがたく、汲み尽くしがたいその価値を言語化しようとしていたのである。

ただし、以上のようなダゴニエの議論が現れてくるのは、早くとも 1990 年代になってからである。『具象空間の認識論』が執筆された 1970 年代や 1980 年代は、意図的に諸科学と融合し、哲学の死亡宣告をおこなおうと見受けられる。大地の科学のプロジェクトの帰趨は、その後の仕事を踏まえることで位置付けられることになるだろう。

7. おわりに

本稿では、影響関係については知られてきたものの、共有する主題が明確化されていないバシュラールとダゴニエについて風景概念を軸に論じてきた。その際、参考にしたのがブルゴーニエの歴史家ガストン・ルプネルである。バシュラールは、ルプネルの仕事に想像力の問題を見出している。これに対して、ダゴニエは、ルプネルやバシュラールの美的風景論を乗り越える風景の科学を主張した。本稿の末尾では、ダゴニエにおける風景の科学の議論を批判的に検討し、屑屋の哲学としてのその可能性について言及した。その意義を明確にすることは今後の課題である。ただし、ルプネルに対して土壌の重要性を説くダゴニエのうちにその後の展開の萌芽を見てとることは不可能ではないように思われる。美的対象としての大地でなく、われわれがそこから資源を取り出し、利用するものとしての大地。科学と文化の境界としての大地を取り上げるダゴニエ議論は、のちの展開の導入に位置付けられるのではないだろうか。その哲学は、ある種のエコロジー論に開かれているのである。

注

- (1) 若かりし頃、郵便局員として働いていたバシュラールは、第一次世界大戦の徴兵などもあり三十代半ばになって哲学の勉強を始めた。貧しい家に生まれたダゴニェは、苦学生として哲学を学んだのち、医学の博士号を取得している。
- (2) バシュラールは、現代科学の技術的性格を「現象工学 (phenomenotechnique)」と呼んだ。科学と技術が密接に関係しているという論点は、現在の科学技術社会論 (STS) にとっては自明な事実であるが、二十世紀前半の科学論の中では新しい指摘であった。バシュラールは、たとえば、超ウラン元素のことなどを念頭に置いている。
- (3) 金森修は、ダゴニェの『具象空間の認識論』の邦訳の中でこの著作 (*Histoire de la campagne française*) を『フランスの田舎の歴史』と訳している。しかし、ルブネルは題名にある *campagne* という語に「耕作された (cultivée)」という意味を付しているため、ここでは「田園」と訳した。
- (4) 「ガストン・ルブネルが私に語ったように、ブドウの樹はあらゆるものをつくる。自分の土さえも。「自分の破片と屑を集め、自分固有の土壌をつくり、そこに自らの果実を育てる。高貴にして精妙なエッセンスを作り上げたのは、葡萄の樹自身である」(Bachelard 1948:323)。
- (5) もっとも、それはバシュラールの立場の「転回」を示すものではなく、「元素の詩学」でなされた主張の一部を「展開」したものだと理解できる。この点については、上野 (2021) を参照。
- (6) おそらく、バシュラールは、ひとはみな家のイメージを有するが、風景についてはそうではないことから後者を前者より劣ったものとみなしている。とはいえ、本論でも述べているように、バシュラールは風景のイメージが伝達しうるものであり、作品を通じて共有されうると考えている。この点を敷衍することでバシュラール詩学におけるイメージの教育や伝達の問題を論じることは可能だろう。

参考文献

バシュラール、ダゴニェ、ルブネルからの引用に際しては、参照している版の出版年を記した。ただし、書籍の公刊年の前後関係を明示するため、本文中ではじめて書名に言及する際には引用していない著書を含め『書名』(初版出版年)という仕方出版年を明記している。(……)は省略を示し、[]による補足は著者によるものである。翻訳については適宜参照したが、著者の責任において一部訳語を変更している。

Bachelard, Gaston. 2016 [1932]. *Le pluralism coherent de la chimie modern*. Paris: Vrin.

———. 1990 [1943]. *L'air et les songes*. Paris: Librairie José Corti. (バシュラール、ガストン 1968 『空と夢』宇佐見英治訳、法政大学出版局。)

- . 1948. *La terre et les rêveries du repos*. Paris: Librairie José Corti. (バシュラール、ガストン 1970『大地と休息の夢想』饗庭孝男訳、思潮社。)
- . 2010[1953]. *Le matérialism rationnel*. Paris: PUF.
- . 1961[1957]. *La poétique de l'espace*. Paris: PUF. (バシュラール、ガストン 2002『空間の詩学』岩村行雄訳、筑摩書房。)
- Braunstein, Jean-François. 2019. « Pôles » et « interférences » Dagognet entre Bachelard, Canguilhem et Foucault. in Bernadette Bensaude-Vincent, Jean-François Braunstein, Jean Gayon (ed.). *François Dagognet: Philosophe, épistémologue*. pp. 37-55. Paris: Matériologiques.
- Dagognet, François. 2002 [1969]. *Tableaux et langages de la chimie: essai sur la représentation*. Seyssel. Champ Vallon.
- . 2018 [1977]. *Une épistémologie de l'espace concret*. Paris: Vrin. (ダゴニエ、フランソワ 1987『具象空間の認識論』金森修訳、法政大学出版局。)
- . 1984. *Philosophie de l'image*. Paris: Vrin. (ダゴニエ、フランソワ 1996『イメージの哲学』水野浩二訳、法政大学出版局。)
- . 1990. *Corps réfléchis*. Paris : Odile Jacob.
- . 1997. *Des détritius, des déchets, de l'abject: une philosophie écologique*. Institut synthélabo.
- Febvre, Lucien. 1934. Questions de fait et de méthode. Une physiologie de la campagne française. *Annales d'histoire économique et sociale*. 26: 76-81.
- Le Berre, Maryvonne. 1998. François Dagognet, « l'espace concret » et la géographie. in Robert Damien (ed.). *François Dagognet médecine épistémologue philosophe: une philosophie à l'œuvre*, pp. 211-227. Institut Synthélabo.
- Roupenel, Gaston. 1974 [1932]. *Histoire de la campagne française*. Plon.
- Whalen, Philip. 2006. Le Régionalisme de Gaston Roupenel, 1931-1945. in Annie Bleton-Ruget et Philip Whalen (ed.). *Le temps des sciences humaines: Gaston Roupenel et les années trente*, pp. 55-85. Éditions Le Manuscrit.
- . 2010. Gaston Roupenel (1871-1946). in Philip Daileader and Philip Whalen (ed.). *French Historians, 1900-2000: New Historical Writing in Twentieth-Century France*, pp. 527-544. Wiley-Blackwell.
- Wunenburger, Jean-Jacques. 2014. *Gaston Bachelard, poétique des images*, Mimésis.
- 上野 隆弘 2021「ガストン・バシュラールの力動的想像力——大地と空のあいだの垂直性」『フランス哲学・思想研究』26:168-178。
- 金森 修 1994『フランス科学認識論の系譜——カンギレム、ダゴニエ、フォーコー』勁草書房。
- 2008「第五章 或る実証主義者の帰趨——フランソワ・ダゴニエ試論」金森 修編『エピステモロジーの現在』pp. 185-234、慶應義塾出版局。